

飛鳥寺塔心礎出土馬具

1 はじめに

1957年に飛鳥寺（法興寺）塔心礎から出土した舍利莊嚴具は、日本列島への仏教導入を考える上で第一級の出土資料である。その概要は報告書によって把握できるが¹⁾、発掘の翌年に刊行されたこともあって、出土遺物については十分な整理がおよばなかった。扶余王興寺など、倭に仏教を伝えた百済の舍利莊嚴具の出土事例が増えた今、その重要性はますます高まりつつある。筆者は現在、飛鳥資料館と協力して飛鳥寺塔心礎出土品の全容をあきらかにすべく基礎的整理を進めており、本稿では馬具に焦点をあて、その成果の一端を紹介したい。

2 馬 鈴

馬鈴は礎石上面西隅より出土した。青銅製の鑄造球形鈴で、鈴本体下部に文様を施文する（図62）。鈕を含めた全高5.8cm、鈴本体の高さ4.3cm、最大幅4.5cm、厚さ1.5～3.5mm、重さ100.95gである。方形の鈕が鈴口と同一方向に設けられており、長さ1.5cm、幅2.0cm、厚さ4.0mmを測る。中央下部に直径0.7cmの鈕孔を設けている。2枚の鑄型を合わせて一体で鑄造したとみられ、鈴本体の上部側面には鑄型の合わせ目が確認される。鈴本体の上部には長さ2.1cm、幅0.8cmの型持孔が一つ設けられている。これと、幅0.3cmの鈴口に設置されたであろう巾木によって中子を支持したとみられる。鈴子は1.2cm前後の川原石で、鑄造の際に中子に埋め込まれていたとみられる。文様は表裏とも基本的に同じで、横1条、縦2条の凸線でT字形に区画した上で、各区画の中央に直径2.3cmの珠圈文を配し、そのほかを直径0.1～0.2cmの珠文で充填する。珠文の数は、表裏および区画の左右で微妙に異なる。鈴本体上部には横方向、鈴口付近には縦方向の研磨痕が認められ、文様部分および鈴内面は鑄肌を残している。

3 蛇行状鉄器

蛇行状鉄器は心礎上面西南隅より出土した。「幡竿」とみる意見もあるが、ここでは馬に装着する「寄生（馬の尻部に立てられた装飾品）」とみる立場に立って図化をお

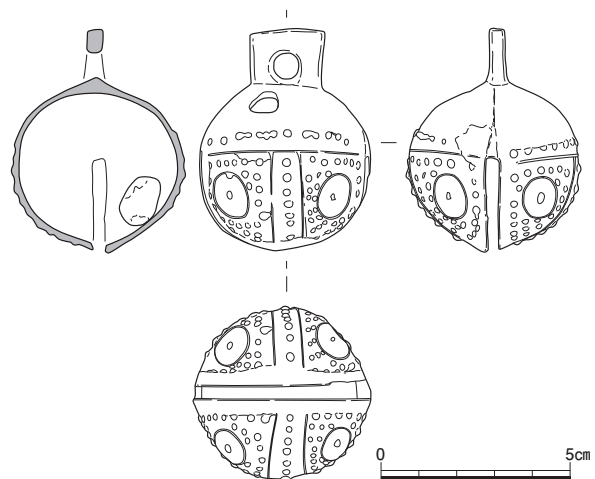


図62 飛鳥寺塔心礎出土馬鈴実測図 1：2

こなった（図63）²⁾。U字形の部材と蛇行状の部材で構成され、3点の破片に分離してしまっているものの、およそその形状を復元することが可能である。

U字形部材（3）はほぼ完形で、残存高17.3cm、最大幅46.2cmを測る。幅1.5cm、厚さ1.0cm、断面隅丸長方形の鉄棒を鍛打して、浅いU字形に曲げてつくる。中央部分は分厚くつくり、長方形の柄を設けている。この柄に蛇行状部材の下部を差し込み、突出部分を折り曲げて固定している。U字形部材の両端には長さ1.2cm、幅0.5cmの長方形孔が穿孔され、ここに革紐などを通して、馬腹あるいは下鞍に固定したとみられる。

蛇行状部材は三つに分離しており、正確な形状はわからないが、少なくとも6箇所の変曲をもつとみられる。一辺2.5cm前後、断面隅丸方形の鉄棒を鍛打して、上部は袋状に、下部は板状につくった後、下部付近はS字形に、それ以外は60度ほど変曲させている。袋部（1）は直径3.5cm、深さ14.0cmほどで、口縁付近に1条の浅い凹線がめぐる。今回の整理にあたってX線写真を撮影したところ（降幡順子による）、袋部に縦方向の合わせ目が明瞭に確認され、開口部より下方約2cmのところには直径0.4cmの目釘孔も確認された。本来袋部には旗竿が挿入されていたとみられるが、袋部内面に木質の付着は認められない。開口部が西壁に接して出土していることから、旗竿は外した状態で埋納されたと考えられる。また袋部付近の外面には織目を異にする複数の織物痕跡が認められ、何かで包まれていた可能性もある。

4 飛鳥寺塔心礎出土馬具の系譜と製作地

馬鈴（図64） 飛鳥寺例のような鑄造球形で文様をもつ馬鈴は、5世紀後葉～末（TK23・47型式期）には出現したとみられ³⁾、和歌山県大谷古墳（1・2）や熊本県

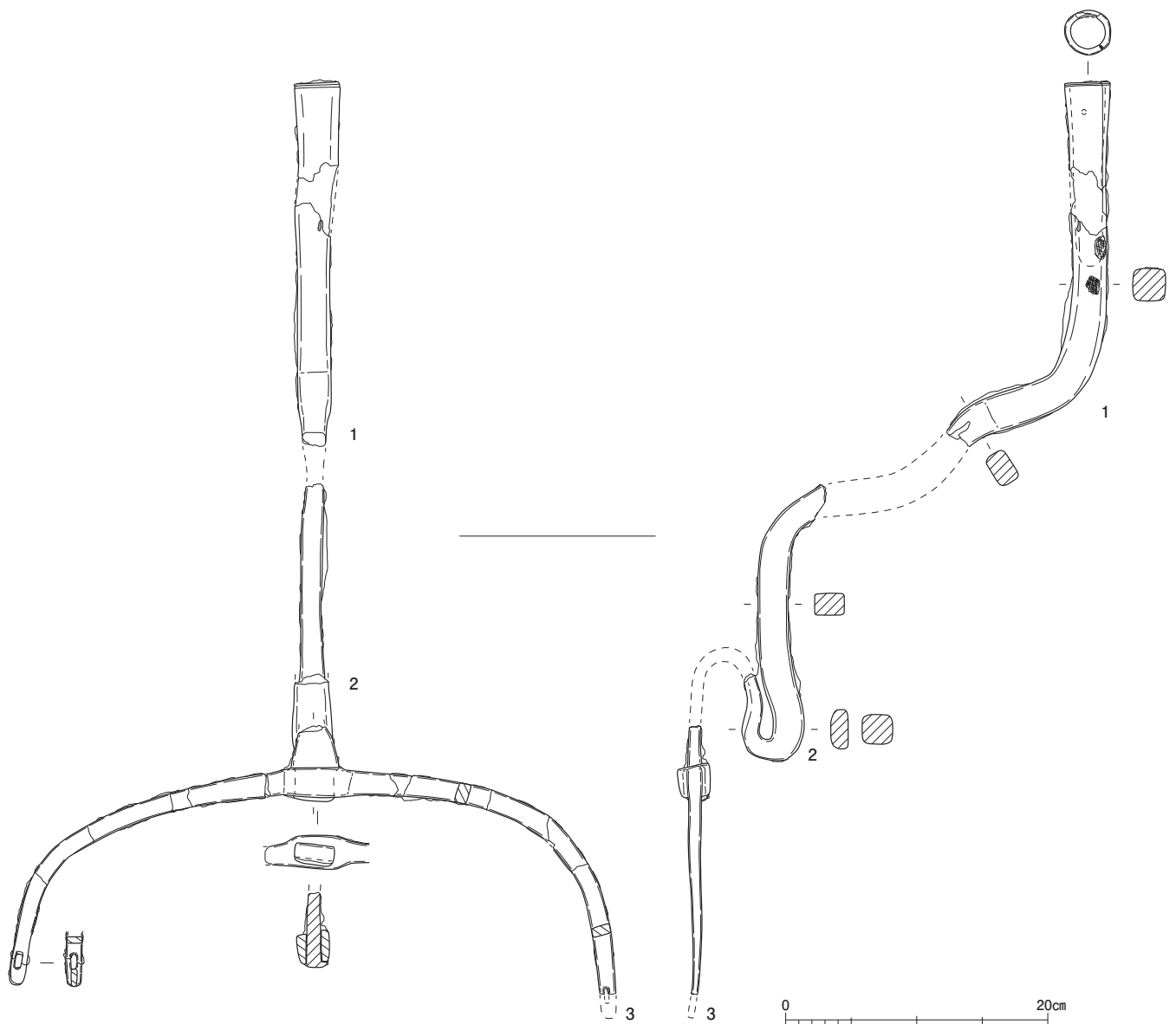


図63 飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器実測図 1 : 5

塚坊主古墳（3）からは、十字に区画した上で圈文を配する馬鈴が出土している。飛鳥寺例のようなT字形に区画した上で珠圈文を配する馬鈴は、これらを祖形とすると考えられている⁴⁾。これらの類例は高霊池山洞44号墳25号石槨（4・5）や陝川玉田M3号墳（6・7）、固城松鶴洞1A-1号墳（8・9）など同時期の大加耶を中心とする加耶諸地域から出土しており、初期のものについては加耶で製作されたものが含まれている可能性が高い。

一方、6世紀後葉（TK43型式期）に出現する珠文を密に充填するタイプは、飛鳥寺のほかにも鳥根県岡田山1号墳（10）など国内には類例が散見されるが、大陸にはまだ類例をみない。珠文を多用するなど馬鐸と文様に共通性が認められ、日本列島で製作されたとみられる⁵⁾。

蛇行状鉄器（図65、表7） 蛇行状鉄器は国内では8遺跡からの出土が知られるほか⁶⁾、埼玉県酒巻14号墳からは蛇行状の寄生を装着した馬形埴輪が出土している。飛鳥寺例を除くとすべて古墳からの出土で、時期は酒巻14

号墳を含めて6世紀後半に集中する傾向がある。

大陸では朝鮮半島南部で16遺跡からの出土が知られている。そのほとんどが古墳からの出土で、盛行時期は5世紀後葉～6世紀中葉と日本列島よりも早い。近年も着実に資料が増加しており、特に高句麗の漣川無等里第2堡塁や百済の公州公山城といったこれまで分布しなかった地域からも出土するようになったことは重要だが、かたちはこれまでに知られているものとは少し異なるようである。なお、「寄生」は中国南朝の馬装に由来する用語であるが、飛鳥寺例のような蛇行状の寄生は図像資料を含めても高句麗より西方ではまだ確認されていない。蛇行状の寄生は、東潮によれば4世紀末に位置づけられる高句麗の集安通溝12号墳の壁画に描かれているものが最も古く⁷⁾、高句麗を基点として朝鮮半島南部へ広がっていったものとみられる。

次に形態的特徴から飛鳥寺例の系譜について考えてみたい。これまでに知られている蛇行状鉄器は、装着方法

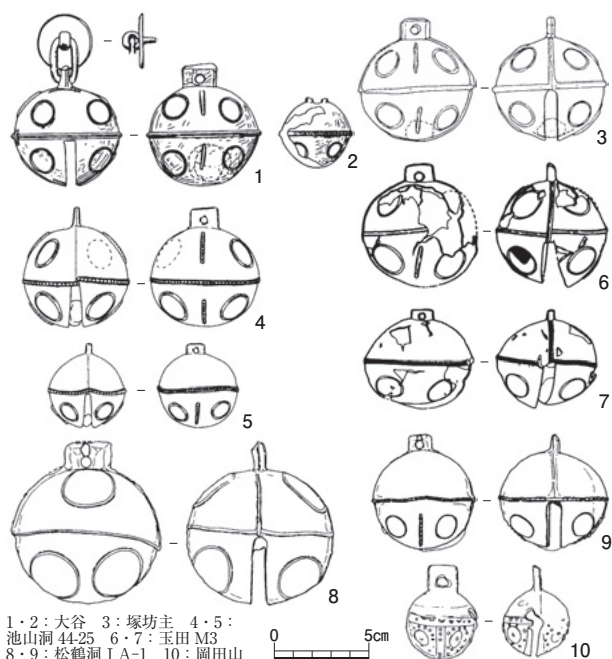


図64 馬鈴の類例 1 : 4

によって後輪掛留式 (A・C・D) と居木打込式 (B) に二分される。前者は後輪内側にU字形部材をあて、その先端に設けられた孔に革紐などを通して、馬腹あるいは下鞍と連結し、蛇行状部材の最初の屈曲部で後輪を挟み込んで固定するのに対し⁸⁾、後者はU字形部材の先端を居木に直接打ち込んで固定したとみられる。日本列島の事例は飛鳥寺例を含めていずれも後輪掛留式で、居木打込式はまだ確認されていない。

飛鳥寺例のような袋部一体造の後輪掛留式は、陝川玉田M3号墳例 (A) や梁山夫婦塚例 (C) など5世紀後葉以降の加耶や新羅に系譜を求められ、福岡県大井三倉5号墳例 (D) など6世紀中葉～後葉には日本列島に伝わったとみられる。形態、製作技術に共通性が認められ、出現の遅れる日本列島の諸例は、舶載品あるいはその忠実な模倣品とみるべきだろう。ただしU字形部材の先端形状をみると、ほかの多くは蕨手形や円環形であるのに対し、飛鳥寺例のみ方孔を穿ける。朝鮮半島ではまだ方孔を穿けるものが確認されていないことをふまえば、国産品を抽出する指標となる可能性もあるが、未報告資料も多く、今しばらく資料の動向を見守りたい。

セットとしての評価 飛鳥寺のように蛇行状鉄器に鑄造馬鈴が相伴する事例はさほど多くないものの (表7)、先述の酒巻14号墳出土馬形埴輪の胸繫には、2点の馬鈴が取り付けられており⁹⁾、飛鳥寺とほぼ同時期の倭に同様の馬装が確かに存在したことがうかがえる。また朝鮮半島の2例 (玉田M3、松鶴洞 I A-1) が、いずれも加耶古墳で、かつ圈文を配する馬鈴であることも注目される。飛鳥寺塔心礎出土馬具の系譜については、これまで蛇行状鉄器の分析から加耶ないし百済という可能性が提起さ

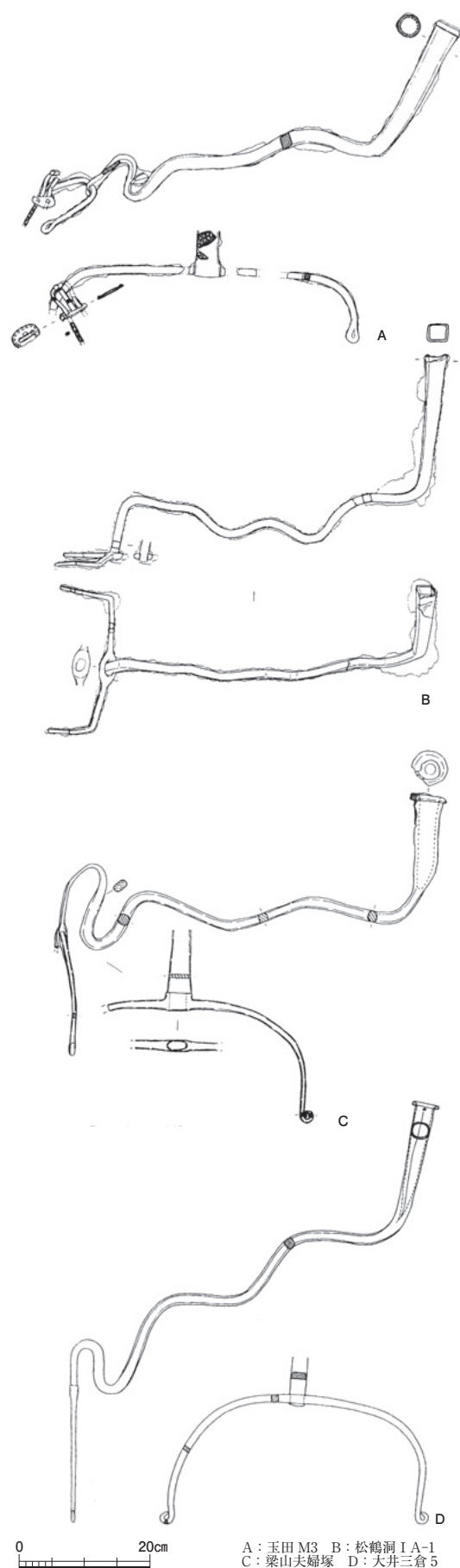


図65 蛇行状鉄器の類例 1 : 10

表7 蛇行状鉄器一覧

出土地	遺跡名	点数	装着方法	袋部	U字先端	屈曲数	馬具	時期	備考
倭	福岡 手光南2号墳	1	後輪掛留	別造	蕨手	6	○	6世紀後葉	
倭	福岡 大井三倉5号墳	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	×	6世紀後葉	
倭	福岡 船原古墳遺物埋納坑	3	?	?	?	?	○	6世紀末～7世紀初	未報告
倭	山口 塔ノ尾古墳	1	後輪掛留?	一体	円環?	6 or 8	○	6世紀中葉	複数の絵図が伝存
倭	岡山 穂崎字安部	1	欠失	一体	欠失	7以上	—	—	伝・朱千駄古墳出土
倭	奈良 団栗山古墳	1	後輪掛留	別造	欠失	6	◎	6世紀後葉	
倭	奈良 飛鳥寺塔心礎	1	後輪掛留	一体	方孔	5以上	◎	593年埋納	
倭	埼玉 埼玉將軍山古墳A	2	欠失	一体	欠失	6	◎	6世紀後葉	
	埼玉 埼玉將軍山古墳B		後輪掛留	欠失	欠失	6			
加耶	高霊 池山洞518号墳	1	欠失	一体	欠失	4以上	○	6世紀初	未報告
加耶	陝川 玉田M3号墳A	2	後輪掛留	一体	円環	6	◎	5世紀後葉	
	陝川 玉田M3号墳B		後輪掛留	別造	円環	8			
加耶	陝川 礪波堤タA号墳	1	後輪掛留	一体	欠失	8	○	6世紀前葉	
加耶	南原 斗洛里1号墳	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	○	6世紀前葉	
加耶	南原 月山里M5号墳	1	居木打込	一体	—	6	○	5世紀後葉	
加耶	晋州 玉峯7号墳	1	後輪掛留	一体	欠失	6	○	6世紀中葉	
加耶	晋州 水精峯2号墳	1	後輪掛留	別造	欠失	6	○	6世紀中葉	
加耶	固城 松鶴洞1A-1号墳	1	居木打込	一体	—	6	◎	6世紀前葉	
加耶	咸陽 衆生院1号墳	1	?	一体	?	8	○	6世紀初	
新羅	慶州 金冠塚	3	?	扇形	?	5以上	○	5世紀後葉	詳細不明
新羅	慶州 天馬塚A	3?	後輪掛留	花形	欠失	6?	○	6世紀初	Aは鉄地金銅張。ほかに扇形寄生あり
	慶州 天馬塚B		後輪掛留	欠失	欠失	3以上			
新羅	慶州 金鈴塚	1以上	?	?	?	3以上	○	6世紀前葉	詳細不明
新羅	梁山 梁山夫婦塚	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	○	6世紀初	
新羅	昌寧 校洞89号墳（Ⅱ群10号墳）	1	居木打込	欠失	—	3以上	○	5世紀後葉	未報告
百濟	公州 公山城木棚庫	1	?	一体	—	3以上	○	7世紀代?	未報告
高句麗	漣川 無等里2堡壘	2	そのほか	一体	—	1	?	6世紀代?	未報告

* 出土地不明品は除外した。○：そのほかにも馬具が出土（鑄造馬鈴が出土しているものは◎）。

れてきたが¹⁰⁾、馬鈴を含めて考えると、加耶に限定することも可能であろう。ただし、加耶からは珠圈文を配する馬鈴や、U字形部材先端に方孔を穿ける蛇行状鉄器は出土しておらず、また加耶自体、562年に滅亡してしまうことをふまえれば、その製作は加耶系馬具を製作する倭の在来の工房においてなされた可能性が高い。

5 おわりに

これらの馬具は、推古元年（593）正月に飛鳥寺でおこなわれた仏舍利を埋納し心柱を立てる儀式に際して、ほかの様々な器物と共に納められた舍利荘厳具の一部である。いわゆる「飛鳥寺系縁起」には、この儀式に蘇我馬子をはじめとする参列者が百済服を着て臨んだ様子が詳細に記されている。儀式の際には「馬幡五百竿」が立てられたとあり、塔心礎に納められた蛇行状鉄器はその一つであったのかもしれない。

文献を読むかぎり百済一色にもみえる儀式の中で用いられた馬具が、加耶に系譜をもち、倭の在来の工房においてつくられた可能性が高いという筆者の理解が妥当であれば、儀式の実態は多少違ったものとなる。それを同時期の古墳祭祀との関係で説明することは簡単だが、比較すべき資料が飛躍的に増えた今こそ、まずは飛鳥寺塔心礎から出土した様々な器物の資料化を進め、その全貌をあきらかにする必要性を強く感じる。今後も整理作業を継続し、飛鳥寺でとりおこなわれた舍利埋納儀式、ひ

いては仏教導入の実態に迫っていきたい。（諫早直人）

付記

本稿にはJSPS科研費26770276の成果の一部を含む。

註

- 1) 奈文研『飛鳥寺』、1958。
- 2) 寄生説は蛇行状部材先端の袋部に旗竿を挿入したとみるのに対して、幡竿説はU字形部材に幡などを吊るしたとみるので、図面の上下が逆になる。なお復元にあたっては、倭で一般的な後輪垂直鞍に装着することを想定した。
- 3) 白木原宣「古墳時代の鈴一主として鑄造鈴について」『HOMINIDS』1、1997。
- 4) 西尾良一「馬具の検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会、1987。
- 5) 註4 西尾前掲論文。
- 6) このほかに滋賀県新開1号墳から出土した「十字形蛇行鉄器」も寄生とみる意見がある（東潮「蛇行状鉄器再考」『勝部明生先生喜寿記念論文集』、2011）。しかし旗竿を挿入するための袋部をもたず鞍への固定方法もよくわからないため、ここではひとまず除外しておく。
- 7) 註6 東前掲論文。
- 8) 白井克也「梁山夫婦塚における土器祭祀の復元」『東京国立博物館紀要』42、2007。
- 9) この馬形埴輪には環状鏡板付轡や三角錐形壺鐙なども表現されている（行田市教育委員会『酒巻古墳群』、1988）。蛇行状の寄生を除けば同時期の倭で盛行した馬装とみてよい。
- 10) 東潮「蛇行状鉄器考」『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1997など。